

現地レポート ● 秋田県 発



新しい土づくり肥料「シリカ未来」の普及

秋田県は、米の収穫量が全国第3位と水稻の生産が盛んな県であるが、近年、夏場の高温などの気象変動により、収量・品質に影響がおよんでいる。

秋田県内の水田に対するケイ酸施肥量は年々減少しており、土づくり肥料として施肥したケイ酸分は、平成15肥料年度の4,160tに対し、平成24肥料年度は3,075tと26%も減少している。また、県内では、pH5.5以下の圃場の割合が70%と大部分の圃場でpHの低下が進んでいる。

J A全農あきたでは「良質・安定収量の米」を実現させるため、丈夫な茎や葉をつくり、いもち病などの病害虫の被害や、割れ籾発生と斑点米の被害を軽減する効果があるケイ酸を中心とした土づくり肥料の拡大を強化している。その一環として、新しい土づくり肥料「シリカ未来」(ミネックス株：写真-1)の普及・推進を始めた。



写真-1 ケイ酸肥効の高い「シリカ未来」

未来に向かって復興する思いを込めた「シリカ未来」

岩手県釜石市にあるミネックス株は、東日本大震災による津波で工場や肥料製造設備に被害を受けたが、東北唯一のJ Aグループ土づくり肥料メーカーとして再開をめざした。こうしたなか、未来に向かって復興するという思いを込め、新しい土づくり肥料「シリカ未来」が開発され、平成25年6月に販売を開始した。

「シリカ未来」は、鉄鋼スラッグの品質を吟味した肥料で、可溶性と水溶性の2種類のケイ酸を含み、イネに効率よく吸収されるので、従来品の6割程度の量で同等の効果が期待できる。また、鉄・ケイ酸・マンガンを含み、稲わらを施用した田んぼの根腐れを防止し、根の活力を高めるといった特徴がある。

現地試験で「シリカ未来」の施用効果を確認

「シリカ未来」の効果を確認するため、平成25年度の施肥合理化圃場では県内4 J Aで試験を行った。図-1のとおり、6月25日の茎数調査結果をみると、「シリカ未来」を施用すると無処理区に比べ茎数が増え、根の量

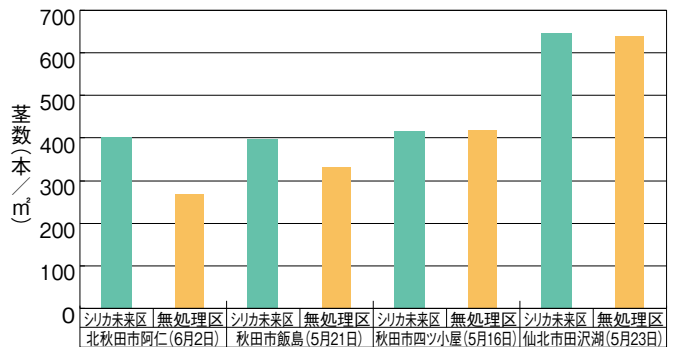


図-1 6月25日の茎数調査結果
(平成25年度施肥合理化圃場試験成績より)
窒素施肥量は両区共通
シリカ未来区は60kg/10a(ただし、仙北市田沢湖のみ90kg/10a)

が増加していることもわかった(写真-2)。

また、図-2のとおり、シリカ未来区の精玄米重は、秋田市2地区(下新城・雄和)ともに無処理区を3~10%上回った。くず米重は、下新城ではシリカ未来区、無処理区ともほぼ同じだったが、雄和のシリカ未来区では57kg/10aと無処理区71kg/10aより少ない結果となった。



写真-2 「シリカ未来」の効果
(2013年・秋田市、移植9日後、6月7日調査)

今回試験を実施していただいたJ A担当者からは「収量・食味値は良好であった」「倒伏レベルは対照区より低下した」「根量が多かった」「茎が太くしっかり

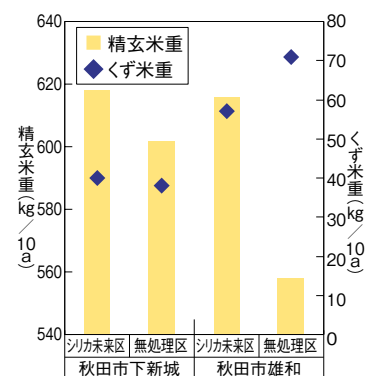


図-2 収量調査結果 (篩1.9mm)

していて収量が増えた」「来年も続けて使用してみたい」などの声があり、全体的に高い評価をいただいた。

これらの試験結果から、土づくり肥料の重要性・有効性を示している「シリカ未来」は、東北各県が共同で推進する銘柄として位置づけている。現在、青森県・岩手県・山形県でも試験が行われており、今後、東北各県の普及が見込まれる。
【全農 東北肥料農業事業所】